【 カテゴリ ／ 随筆・時評 】　　【 2000年　第3号　掲載 】

ずいひつ

私と獅子加那志（シーシーガナシー）との関わり

広報副委員長　赤嶺健範

沖縄の獅子加那志の始まりについては、はっきりした記録はない。ただ1800年頃に獅子舞が行なわれていたという記録があるとの事。
中国や東南アジアなどから伝わったものといわれている。
　現在県内に183頭獅子が存在している。各地の獅子頭の分布を示すと別表の通りである。
　獅子は県内各地に存在し、特に宮古、八重山に多く分布している。本島ではムラムラに一頭だが、宮古・八重山では、雄と雌のつがいで存在する。
　これらの多くの獅子頭も先の大平洋戦争で消失したり、行方がわからなくなったりした。
戦火をのがれた獅子頭が伊平屋村田名や名護の我部祖河等には残っている。
　その他の地域で現在使われている獅子頭はほとんどが戦後復元されたものである。災厄を払い、五穀豊穣をもたらす『守り神』として大切にされている。
　年間でもムラムラで定まった日（旧盆・十五夜等）しか舞わされることもない。ましてや門外不出としている所が多い。
　ところで、私のムラ・那覇市大嶺の獅子加那志について触れてみたい。
　大嶺の獅子加那志は数百年の古来よりムラの守護神として永く伝えられている。
　この獅子も、さきの戦争（昭和19年頃）の戦火で行方不明となった。戦後人々のくらしが落ちついた昭和36年（1961年）にムラの船大工・金城亀栄氏により復元されて、すでに39年を経ている。県内のほとんどの獅子がそうであるように、獅子頭はデイゴの木で作られている。デイゴの幹を海水で煮沸させる。
これは病害虫の駆除の為、それを乾燥させた後に彫る。きれいに彫刻され、顔形の整った獅子頭は、琉球漆の技工で化粧されて光沢を放つ。胴体は大宜味村喜如嘉でとれる芭蕉のウー（繊維）を染色したもので作られる。
獅子のたてがみは馬のたてがみが用いられ、シッポは馬の尾を皮付きのまま用いられている。
　大嶺の獅子の最大の特徴は、両目がキョロキョロ動くことである。全県で183頭の獅子が在るが、目が動く獅子は唯一大嶺の獅子のみである。獅子を舞わせながら舞手が操作して目を動かす。
なかなかの迫力である。それだけで子供達は逃げまどう。
　大嶺の獅子舞の行事は毎年旧盆のウンケーとウークイ、旧の十五夜の晩に行われる。
　魔神を追払い、災難、病魔からムラを守る為に行われる。地謡はドラ、カネ、パーランクー、鉦鼓という打楽器のみで行われる。他の獅子舞のほとんどが三味線を主体に行なうのに対し、打楽器のみで行なうのは大嶺の獅子の特徴といえる。私が大嶺獅子舞保存会に籍を置き、獅子舞にたずさわるようになったのは、平成8年の4月からだった。その頃、我々の保存会は後継者不在におちいり、決していい状況ではなかった。そこでまず、我々は獅子加那志の補修、化粧直しからスタートさせた。

勇壮に舞う大嶺獅子加那志大阪公演　ｉｎ　国立文楽劇場

獅子頭を紅房(漆し塗り工房)に外注し、頭の全面を化粧直しし、胴体を新調するため、喜如嘉まで足を運び、芭蕉のウーを手に入れ、染めを外注に回す。そうこうするうちに40代、50代、60代の有志が10数名集まった。当然40代の我々が舞手を演じなければならなかった。

若い後継者をどう募り、育てていくかが大きな課題となったのはいうまでもない。伝統の舞をベースにして、いろいろな技を組み入れて変
化をもたせ、興味と意欲が湧くような試みをした。

そのため、獅了舞フェスティバル等の獅了舞の発表の場に足を運び、技術の習得に専念した。約1年がかりで見せる獅子、魅せる獅子としての獅子舞の型を完成させた。

その型を基に活性化をはかるため、これまで門外不出とされてきた獅子を外へ出すことで、各種のイベントからの要請を受け入れ、参加するように心がけた。

そうした体制を整えると不思議なもので、スポレクオキナワ97'の開会式のオープニングフェスティバルを皮切りに、沖縄コンベンションビューロー主催の大琉球まつり王国をパレットくもじ前の特設会場で出演と発表の機会が得られた。そうこうしているうちに、沖縄の獅子加那志の大競演を国立大阪文楽劇場で行う計画が持ち上がり出演することなになった。6団体の中に加わることになり、まさに朗報である。

去年の9月5日に出演した大阪公演は大盛況のうちに終了した。その時のエピソードを一つ。公演の当日、我々の演技が終わり、楽屋でくつろいでいると、70代の老夫婦が訪ねてきた。戦前、故郷をはなれ、京都に移り住んでいたとの事。60年振りにムラの獅子舞を見させてもらった感動、感激のあまり、我々の前で感きわまって涙を流した。しばらくは思い出話に時間がすぎたのはいうまでもない。この老夫婦のためにも公演をやってよかった。獅子舞をやっていてよかったと思った。
この瞬間に沖縄の文化の力、伝統の力の大切さを痛感したものだった。

ここで沖縄の伝統文化である『獅子舞』の後継者づくりへの取り組みについてつづってみる。　後継者をつくり、育てるにはどうしたらよいか、模索している時、保存会の先輩方は読谷まつりで偶然見たものに目を奪われた。

それが子供獅子舞である。読谷村渡慶次、獅子舞クラブの群舞は素晴らしかったとのこと。小中学の子供達の生き生きとした演技は見る者に感銘を与えてくれた。

これこそ後継者づくりと合わせて、青少年の健全育成につながることだと、次へのアクションが始まった。

少し長いスパンで、大きな目で育てようという趣旨で始めたのです。それが「若獅子隊」の誕生である。

全島子ども獅子舞フェスティバル ｉｎ まつだにおける ”若獅子隊” の演技

手作りの獅子を製作し、子供達を募り、子供達にふさわしい振り付けを考えて、当初は獅子頭8頭、子供達10人程度からスタートした。その頃、丁度保存会の立て直しが済み、落ち着きを取り戻していた。平成9年7月頃である。週一度の夜、2時間程の練習に汗を流した。練習を積んで上達してくると、人前で発表したい、
催し物に出たいという意欲が子供達の間から話がでるようになった。当時は知名度もないので、お呼びがかかるはずがない。そこで我々自ら『子供まつり』を企画し、発表の場を設けることになった。これがきっかけで、次第によそからの出演依頼が出てくるようになり、活発な活動になってきた。子供達も20数名に増え、獅子頭も15頭にまで増えた。もちろん全て手作りである。

発足してから3年余が経ち、平成9年に入隊した3人の中学生が今では高校生。そして、若獅子隊も卒業し、獅子舞保存会の一員として技術の習得に汗を流している。

先日行なわれた沖縄サミット御万人カチャーシーフェスティバルには、獅子舞の演舞として全島から9団体が出演したが、その1団体として、大嶺の獅子加那志も依頼を受け、出演した。　この時に演舞したのが、あの高校生3人である。舞手として立派に大役を果たし、あのサミットの晴れの舞台で、沖縄の伝統文化の獅子舞を世界のメディアの前で披露することができた。

これからは若手の精進を願うとともに、我々も沖縄の伝統文化の継承に努め、暖かい目見守っていきたい。
(Ryu設備設計代表者)

（別 表）

各地の獅子頭

市町村名	頭　数	市町村名	頭　数
国頭村	1	西原町	8
東　村	1	浦添市	3
今帰仁村	8	那覇市	7
本部町	5	具志川村	1
名護市	8	糸満市	9
宜野座村	2	東風平町	4
金武町	2	具志頭村	1
伊平屋村	1	玉城村	4
恩納村	2	佐敷町	1
石川市	2	与那原町	2
与那城町	2	大里村	2
勝連町	4	南風原町	4